



南極観測のはじまりと昭和基地開設

南極観測のはじまり

1882～1883年（明治15～16年）は、^{こく さいきょうどう}国際協同のもと極地（主に北極）で観測を行った年で、第1回「^{きょくねん}国際極年」と呼ばれています。ヨーロッパを中心に11か国が参加しました。

50年後の1932～1933年（昭和7～8年）の第2回「国際極年」では、日本を含めた34か国が参加しました。日本は、北極の気候に近い富士山頂での気象観測の開始や、^{たんば}短波通信実用化に向けた国内での^{てんり}電離層観測などを行いました。

1955年、ベルギーのブリュッセルで次の国際極年についての会議が行われ、南極での本格的な観測が計画されました。南極地域の現地調査や観測の重要性を感じる研究者が多かったため、日本は参加を表明しましたが、第2次世界大戦の^{いこん}遺恨を持つ国からは、「敗戦国である日本は国際舞台に復帰する資格なし」という激しい反論がありました。しかし、日本を代表して出席した東京大学（当時）の^{なが たけし}永田武教授（のちの第1次南極観測隊長、極地研究所初代所長）が、^{しらせ}※白瀬南極探検隊（1910～1912年）の活動成果と日本の地球科学に対する過去の実績を主張したところ、最終的には全会一致で^{しやうにん}国際承認を得ることができ、正式に日本の参加が決定されました。1957年～1958年（昭和32～33年）の第3回「国際地球観測年」（「国際極年」から名称変更）の、日本の南極観測隊の^{はけん}派遣はこのとき決まったのです。

※白瀬^{しらせ}（しらせのぶ）を隊長とする探検隊は、1912年（明治45年）1月28日、南緯80度5分に到達し、この地域を「大和雪原（やまとゆきはら）」と名づけて日本の領土にすることを宣言しました。現在「南極条約」により、南極はどここの国にも属していません。

「宗谷」の出航と昭和基地の開設

盛大な見送りを受けて、第1次隊南極地域観測隊（当時の名称は予備観測隊）53人を乗せた観測船「^{そうや}宗谷」が東京の晴海港を出航したのは、1956年（昭和31年）11月8日のことです。そして1957年（昭和32年）1月29日、永田武隊長以下全員がそろって南極のオングル島に上陸。その地に「昭和基地」を開設することを決定し、正式に上陸式が行われました。基地に搬入した物資の総重量は151トン。約2週間で、居住棟や発電棟など4棟が建設されました。



【「宗谷」の出航】



【第1次越冬隊11人】写真提供：日本極地研究振興会

第1次隊の当初の目的は、「日本の南極観測基地として適当な地域を決定し、基地建設を行い、必要な観測を行って、次年度における第2次隊による越冬観測の準備」でした。つまり第1次隊は当初越冬しない予定でしたが、現地の状況が良好で、安全の見通しがたったため、11人の隊員が越冬隊として^{ざんりゅう}残留することになりました。